

北國紀行 (一)

丹波浪人

○
Iピスに感心する。

慌て、飛乗つた秋田行の列車は、雪風寒い北國に吾等をつれて行く、スキーで名を得た水上驛、其の名を聞かされるだけでも吾等の合服旅行の前途を寒からしむる、上越の國境あの名高い清水隧道にかゝると、吾等を何と見たものか車掌先生、隧道の説明をして呉れる、隧道延長九千七百米、之が開鑿に要した工事費千九十二萬圓、事業に就いた勞働者は百四十四萬人であつて随分多數の工夫の死亡を見た、標高六百七十六米で、大正十一年に着手し昭和六年に完成した、隧道内は今寒いが夏になると、上越方面から喘いで來た列車は、こゝ隧道で乗客に冷風を送つて納涼列車に變ると、商賣上手に説明するので乗客一同は鐵道サ

清水隧道の工事位のこと心得て居る筈のS技師も、今更ながら其の當時を思ひ出したものか、政府の鐵道は特別會計でやつて行くから思ひ切つた仕事も出来るのだナ！と、道路の夫れがいつも豫算を削減されて理想的な仕事の出來ないことを啣つたのであつた、先程清水隧道を説明して呉れた車掌先生が、此度は檢札に來る、乗車券と急行券との檢査に出遭つた、僕もS技師も互に上野驛で買求めた切符を呈示したのであつたが、S技師は僕の急行券に不思議の眼を呉れて、一寸夫れを見せと言ふ、何だ君は車掌でもないのにと言へば其の急行券は變だ、互に比較して見ると之は確かに變だ、同じ新發田まで買つたのに、S技師の

は四百料の急行券、僕のは八百料の急行券であつて何れが正當なのか素人には判らない、車掌先生に伺を立て、何れの方が正當かと質すと、S技師の方が正當で僕は七十錢超過拂であることが判つた、車掌先生改札係が氣を附けば直ぐに判つたのであつたと言ふ、併し夫れを改札係に責むるのは無理だ、澤山に押寄せて來るお客の切符の正不正を見るだけでも容易でないのに、出札係の正不正を見ることは氣の毒だ、イヤ夫れは改札係の責任ぢやイヤ夫れは出札の責任ぢや、と暇潰しに常識論を始めたが、今日切符を買ふときには他に一人もお客が居なかつたのに、同時に同じ處に行くと切符を賣るのに間違ふとは妙だ、とS技師は尙も不審の念を捨てない、車掌先生、餘り暇があると人間緊張味を缺くから誤があるのです、自分としては如何ともすることが出来るから下車驛で懸合つて呉れと言つたが、法的に言へば急行券と乗車券とは常に一致するものではない、之を心附かずに買つた者が不注意であると言ふことに感念して、之も鐵道サービスの爲にやつたことと思つて泣寝入る。

越後湯澤に下車して今度新たに認定された東京から新潟縣廳所在地に達する國道を視察する積りだつたが、積雪六尺、到底自動車は通はないと言ふので已むなく新發田に下車することゝした、併し新津から新發田間には雪もなければ新潟には珍らしい程の直線道路があるので、羽越本線の車上から之を眺めて行程を誤つたと思つたが後の祭であつた。併し其の道路も直線とは言ふものゝ幅が狭いので或は見なかつた方が氣を腐らせなかつたかも知れない、イヤ道路のことばかりではない汽車と相並行する水原町新發田間約三里餘りの間に自動車の影だに見受くることの出来なかつたのは、交通閑散なことを物語つて矢張り北國だナと言ふ感を起さしむる、縣の經理課長西芳雄君から、今は農繁期だから交通が勤いと聞かされたが假令夫れにしても關西の比ではない。

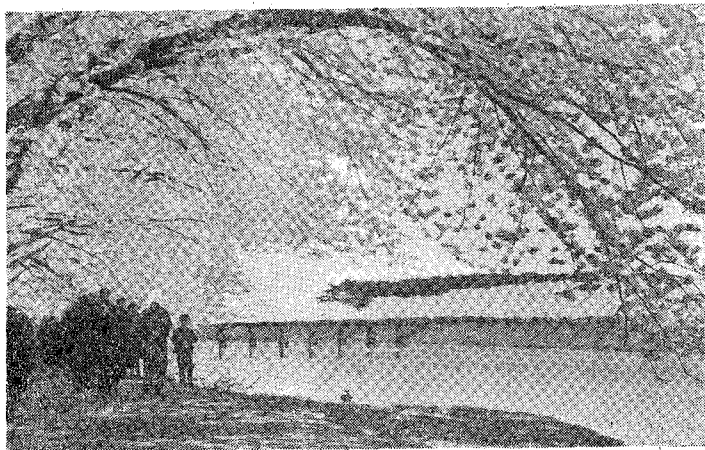
此處、新發田から新潟まで政府が執行した改良道路を拜見するのが私の旅する目的の一つであるが、新發田を離るゝ二里のところ日本一の櫻があると聞かされ、而かも夫

れが新潟方面の觀客を呼んでゐると聞かされたので之に通

任に方つた當時の縣土木課長奥山龜藏君が計畫し實行した

する道路の状態を見るのも役目の一つと心得て夫れに足を向ける、府縣道を辿つて着いたのが加治川の分水路であつた、幅四五十間の分水路の兩側堤防に二十年も経つたであらう老櫻が三里の長きに亘つて植付けられ、樹數八萬と稱せられてゐる、夫れが今満開である、遠く東方烏帽子山の皚々たる積雪を背景としての光景、北國ならでは見ることゝ豫想することも出来ない。

阿賀野川に流入する加治川の水が氾濫するので、加治川の中途眞野原村から流水を日本海に放流する爲に施設されたのが加治川分水路であるが、之が實施の



て看過すべきでは無からう、内務省邊の所謂高級技術官に

のである。奥山君が築堤ばかりをするのが土木屋の能事ではないと思つたかは知らないが、兎も角築堤と同時に櫻を植へたものだ、夫れが漸次生長して今日の櫻の名所地と爲るに至つた、彼れ奥山は二三年前まで代議士になつてゐた男で、餘り風流氣のない短的に言へば土方其のもの、やうな男であるが、人は見かけに依らぬものとやら、風流味の表はれは今日の盛況を呼はしむるに至つた、五箇月も雪の下に暮した地方人士が解雪の爲に更生せむとするとき此櫻花に元氣附けられて春の野原に動くのである、之を想ふとき一名所とし

言はしむれば堤防には植樹は禁物であると言ふであらうが、河底を浚へたり盛土ばかりするのが土木屋の任務ではない、地方生活の要求も稽へて事情に即した土木施設を爲さなければ高級の土木技術の應用とは爲らない筈、モ一可い加減に眼醒めないと彼れ奥山式の技術官に世間知らずと笑はれるであらう。

新發田から西一萬五千米の間の十號國道は幅員七米三に改良されてゐる、舊道が幅三間足らずで屈曲の多かつたのに比較して面目を一新したが、路面は矢張り砂利敷であるのと、築堤土留を木柵にしてゐるのが、非永久的な考案であることを嘆かしむる、工事擔任者に言はしむれば色々な理屈もあらうが政府が執行する以上は永久的のものに仕上げて縣に引渡さなければ始末が悪い、事業費に五十萬圓も使つて假設的施設に満足せなければならぬのは、起工の動機が失業救済と言ふのであつたから勞力消化に重きを置いた勢であらう、夫れちやから言はないことではない、失業救済や時局匡救と色々な理屈を附けて事業を執行するから

事業本位を忘れるのである、路政に對する自覺のないのを叩つてゐる内に沼垂に着いた。

沼垂。今では藝者勝太郎の産地として知る人ぞ知る位に扱はれてゐるが、此處が新潟港發展の根據地であることは餘り多くの人は知るまい、越後一圓の貢米の集まつたのは此處であつたのだ、此處から新潟港に案内された。

明治元年に日本海岸唯一の開港場として指定されたと思張つてはゐるが、近代港灣の機能を發揮するやうになつたのは何と言つても大津分水路が施設されてからのことであつて信濃川の流砂を防止することが出来たお蔭だ、港内水面積六十萬坪で水深は十八呎乃至二十二呎を有してゐるが、夫れではまだ不十分だと言ふので港口から上流五百五十間を幅員八十間を三十尺に、更に上流四百間を幅員百間水深二十八尺に、夫れから縣埠頭に至る間を幅員六十間、水深二十五尺に浚渫してゐる、上屋倉庫二萬七千坪で二十七萬噸の收容能力を持つてゐる、工場地帯も都市計畫實施後に於ては百五萬千坪を算するに至るのであつて、連絡鐵

道も敷設され相當の設備を見るのであるが、更に例の日滿貿易の對策として第二期の擴張が計畫され埠頭を擴張し水深を増加し貯炭場を擴張しドックや上屋を増加し貯木設備をすることに爲つてゐるが、之が完成すると四千噸級汽船が六隻碇泊し得ることゝ爲つて四百五十萬噸の荷設能力があると聞かされた。

此く聞かされて見ると新潟港の將來も滿更捨てたものではない、港口附近にある臨海株式會社の埋立地が今のやうに放牧場に使はれてゐるやうな慘狀は解消するであらう、併し惜むらくは河口港の勢で利用水面積は自然的に制限され、いかに護岸の整理や岸壁の築造を計畫しても其の能率や知れたもの、夫れに例の流砂の問題が惱の種である、そこで河川を港灣に利用するのは無理であると言ふ議論も起つて更に小河津を新設する主張も起つて來るのは當然であらう、夫れに現在でも信濃川の流砂毎年六萬坪と言はれ、之を浚渫するが爲には十萬圓の費用を要するのに八萬圓の豫算しか計上されてゐない、言はゞ一箇年に二萬圓で浚渫

される土砂が堆積する勘定で、今も三千噸級の船が港外に碇泊してゐる有様は、計畫と實際とが合つてゐない心地がする、更に陸上連絡設備は臨港鐵道線が二つあるだけで、近代道路の施設は見たくもない有様だ。之で日滿連絡の大使命を果たそうとするのは無理であらう。

縣廳を訪れると廳舎は近代的建築物で北陸第一と褒めても間違はない、山本内相が巡視のとき知事室に憩んで俺の部屋よりは立派だナと感心したのも無理はない。長官千葉了、彼は地方行政に一見識を有し中央政府の方針を御無理御尤もと聞く様な男ではない、中央の方針と地方の實情とに對照して判斷した上で施政せむとする、で其の判斷に誤ないことを期する爲に克く部下の意見を聽取する、從つて部下を召集し議論を闘はすが、感情に捉はれないから部下からも十分の意見を陳述する、此様な調子で縣治を策する勤勉な事務家である、夫れに彼を目するに政友系を以てする向もある、成る程彼は本會の水野會長が内相であつた

とき、本縣の内務部長から拔擢されて三重縣知事と爲つたが、若槻内閣になつて減首され、田中内閣に爲つて一の一番に復活したことを聯想すると、或は其の批評も無理からぬことであるが、履歴を調べあげて事務官を黨派的に見ること、夫れ自身が間違つたことで評

するものは勝手に評するが良いとしても、彼が長野縣知事時代に残した大事業の功績に稽へると、純真な事務官肌の知事たることを裏書きする、三重縣で某代議士の選舉に干渉したと言ふことは干渉された方に缺點があつたのであらう。

縣會の政治分野は民政黨が三分二を占め政友會は三分の一の割合で、中央政治に對する政友の優勢なのに對し反對の現象を呈してゐる、而かも政友會は改造非改造の兩派に分れ、田邊熊一代議士が改造派を指揮して暗闘してゐるから縣政に於ける政友の力は微々振はない、隨つて勢ひ民政

が横暴を極むるのであるが、幸なことには議長をしてゐる民政派西卷進四郎は温厚な男で露骨に政黨色彩を表はさないで餘り非常識な黨争を見ないのは幸である、併し去年の縣會では長岡市にある長生橋の架設繼續費豫算や新津にある農事試驗場を長岡市に移轉する案



長を否決したりした、譯を聞けば長岡市官の市長が政友系なるが爲の嫌がらせであつたと言はれてゐるが、七年度から十年度に亘る繼續費であるものを九年度だけ否決することは縣會の議決を縣會自ら輕視することであつて、假令參事會で追加豫算の形式で其の否を矯正

したにしても政治上許さるべき事柄ではない、此位のこと各地にあることで餘り囃立てる程ではないからマ一政治的に安全な地方と言つて良からう。

土木部制の擴張でこゝ新潟にも土木部が設置され、課長であつた川上國三郎が居据のまゝ部長に爲つて納まつてゐ

る、監理課長には内務省から西芳雄を迎へて据へ、道路課長には福田弘、河港課長には年光十一を以て充て陣容を整へてゐるが、新土木政策は何であるかと尋ねたら縣財政窮迫の折柄だから新事業を計畫しても、政府の土木會議の決定のやうに畫餅になる憂があるから、實行性を確かめた上で計畫することだ、と飽く迄も川上式を發揮してゐる、隨分道路が悪いぢや無いかと言へば治水事業は立派に完成してゐるだらうと言ふ、雪の國を知らないで新潟縣土木を批評するのは間違だと言はぬばかりだ、併し雪の國は新潟ばかりではないと思つたが、夫れの理屈を言はぬ間に佐渡を視察せよとのことで其の勧めに應じ今船出する、土木部の首脳部に對しては言ふべき多くのものがあるが、まだ二三日の内は新潟縣の御厄介にならねばならぬから、夫れは後日のことにして失敬するが、田舎式否な井戸の蛙式に意張つてゐる鍋茶屋と言ふ變な料亭で教へて貰つた、新潟おけさ。を紹介する、御馴染の人には新潟情緒を味はひなす。(新潟より)

新潟おけさ

あだしあだ浪 寄せては返す

よせて返して 又寄せる

まゝよ鹿島に 神あるならば

あはせ給へや 今一度

山でけつころがした 松の木ごろたのやうでも

妻と定まりや 辛抱する

おけさ踊るなら 板の間で踊れ

板の響きで 三味やいらぬ

山できる木は 数々あれど

思ひ切る木は 更にな